

草の根型協力を考える ～国際耕種のアプローチ

第5回：ラオスでの取り組み

1997年から2000年にかけて実施したメコン沿岸地域の農村開発に係る開発調査(AAIニュース第22号、第29号)が契機となって、国際耕種とラオスとの関係が始まった。その後、弊社社員が技術交流事業の一環としてラオスを訪問したほか、国際耕種に関係の深い知人達がFAOやNGOのプロジェクトを通してラオスにおける農業農村開発に参画している。さらに、兄弟会社である国際水産技術開発のスタッフが育ててきた水産養殖のプロ技が始まった。このように、我が社にとってラオスは急速に身近な国になりつつある。さらに、ジンバブエ等の既に草の根活動を実践しつつある国々と比べても、日本からのアクセスに恵まれている。そこで、我が社の草の根活動に相応しい活動を見つけ出すことを目的として、2002年5月に再びラオスを訪れた。現地では、関係者と意見交換をする中から、我々がラオスにおける農業農村開発に貢献できるものとは何かについて、じっくり考え直してみた。

その結果、今後の方針を以下に示すような4つの選択肢としてまとめることができた。

- ① 既述の開発調査で選定した村において、行政による住民のための普及サービスを中心とした仕組み造りに貢献する。
- ② 農家の収入向上を支援するために、とくに過剰生産物や日持ちが悪い生産物を商品として加工販売するような中小企業育成事業に貢献する。
- ③ 既に活動している有機農場における有機栽培、染色、製茶、食品加工といった分野における技術支援を通して、地域開発や間接的には環境教育的な活動にも貢献する。
- ④ 現地に土地を購入して我々が考える有機農業を実践し、周辺農家をまき込んでいく中から、農業・林業・水産業を複合的に組み合わせたような環境保全型農業の推進に貢献する。

③の有機農場は、Vientianeの北方約150Kmほどの所にある観光地Vangviengの郊外にあり、この地域は石灰岩質の山が連なる風光明媚なリゾートとして近年観光客の注目を集めている。カヤック、溪流釣り、トレッキング、キャンプといった観光メニューも充実してきており、ヨーロッパからの若者バックパッカーが多い。いまだ大規模ホテルなどは建設されておらず、部屋数の少ない宿屋(現地ではGuesthouseと呼ばれる)やバンガロータイプの施設が多い。有機農場では、桑を中心に野菜や果樹を有機栽培しており、ここから生産される農産物を利用した絹製品、桑茶、ジャム、果実酒等の加工、およびその生産販売を行っている。また、有機野菜や有機地鶏を使った健康食レストランも併設されている。宿泊施設もあるが一般の観光客用ではなく、1泊2食でWWOF(Willing Workers on Organic Farm)として農作業に携わってもらうという方式をとっている。

昨年11月、織物に詳しい我が社の関係者がこの農場を訪問し、とくに織物と草木染めを対象につき合いを始めてもらった。今後、作物栽培や製茶あるいは食品加工に関してもつき合いができるスタッフを送りこもうと考えている。この場合、日本の技術を教えに行くのではなく、むしろ相手の技術を教えてもらう中から、地域の住民達が考えていることを引き出すことに努めたい。こうした活動を通してこそ、地域における本当のニーズがつかめるものと思っている。ただし、こうした活動にはじっくりと時間をかけることが大切である。長期間にわたって国際耕種として様々な分野のスタッフを送りこむ場合に、これらのスタッフが共通のビジョンを持って相手側と接する必要がある。こんな中から地域住民の主体的な活動が生まれてくるものと信じている。今後、国際耕種としてラオスにおける農業農村開発のビジョンを明確にし、真に地域住民の役にたつ活動を推進して行こうと考えている。



桑茶の生産



有機栽培の桑畑



有機農産物ランチ